

白紙になって御教えを

黎の

発行所
京都市左京区吉田神
楽岡町3
有限会社洛陽社
郵便番号606
電(市)2022番

明主様御真筆

大 東

前号(黎28)では、

明主様が、本教の概略についてお説き下さいましたいくつかの御教え(黎23・27)の中で、共通して御説き下さって居ると思われまふことを少し考えさせていたいただきました。

それは、先ず本教は今までの私共の觀念にある「宗教」とは異なっているということでありまふ。「宗教」というよりもむしろ「宗教以上の宗教、即ち超宗教であり、空前の救いの業と思えばいいのである」(天国の福音書「序文」)とお説き下さって居ります。

ここで私共は前号で申し上げましたように、

明主様がどのようなことを私共に伝えようとして、これらの表現を用いて下さったかを、御教えに基づいて正しく掴ませていただかなければならないと思ひます。もし私共が表面的なその字句だけのお取次ぎをさせていただいた時には、これらの御表現の中にこめられた真意をお伝えすることはおろか、かえって誤解を生じたり、内容のない大言壮語としてうけとられるようなおそれさえ出てくると思ひます。長い間の既成觀念に支配されている私共が、今までに誰一人として夢想だもしなかつた処の永遠の真理をお説き下さった御教えを少しでも正しく深く掴まさせていただくためには、たゞざる御教えの研鑽と、御教いの御業のお手伝いをお許しいただく以外にないことは已に申上げた通りであります。

御教えを拝読させていただくに当って考えさせていただくべきことは、以前(黎2)にも申し上げたことがございますが、私共が知らず識らずのうちに如何に既成觀念に影響されているか、またそのため

に御教えを正しく掴まさせていただくことが出来ないかについてお説き下さいました御教えを抜粋してお取次ぎさせていただきます。

明主様は、フランスの哲学者ベルグソンの学説を入口として次のようにお説き下さって居ります。

「人間は物を観る場合、物そのものを些かの狂いなく観る事は容易ではない。物の実態の把握は洵に困難である。之は何故であるかという事である。

元来、人間は誰しも教育、伝統、慣習等種々の觀念が綜合的に一つの棒のようになつて潜在しているものである。がそ

をなしているからで、もし治つたとしたら、それは治る時節が来たからだというように、棒が種々の理屈をつけ、事実を彎曲してしまうという事は、吾々の常に経験する処である。

斯様に人間の陥り易い過誤を訂正するのが直観の哲学である。即ち物を観る場合、棒に構へられない、虚心坦懐白紙の吾となるのである。それにはどうすればよいかというと、刹那の吾となるのである。即ち物を観た一瞬、直感した印象こそ物そのものの実体を把握して誤りがない。随而、確かに難病が治つた事実を此眼で見たなら、そのまま信ずべきで、

明主様の御教えについて(七) 会長 多田 光行

明主様の御教えについて

(その21)

れに気付く事は殆んどない。之が為、物を観る場合その棒が邪魔をする。例えば、新宗教を観る場合でも、新宗教はみんな迷信邪教であり、インチキであると決めてかかる事で、全く棒が妨害するのである。今日の社会人は、絶えず新聞雑誌からラヂオや人の噂からも耳を通して入ってくるという訳で、増々棒が太く固く出来上つてくる。医者で治らない病気が信仰で治つた奇蹟を見ても、そのままを素直に受入れる事が出来ない。先づ真先に疑念を起すのであるが、之が棒の為である。病氣は医学で治るという觀念が棒の中心

それが正しい見方である。然るにそんな善はない。器械や薬で治らないものが、眼に見えない空に等しいものなので治る訳がないと思うのは、最早棒が邪魔しているからである。そこへ誰かが、「それは迷信だ。そんな馬鹿な話があるものか。」と言うのは、他人の棒が邪魔の協力者となつたのであるから、此点大いに警戒しなければならぬのである。以上が直観の哲学のホンの概念である。

次に万物流転とは、一切は一瞬の間もなく流転しているという。例えば昨日の吾と今日の吾とは必ずどこか違つている。否五分前の吾と今の吾とも違つている。昨日の世界も、今日のそれとは同一ではない。社会も文化も国際関係も勿論そうである。従而、人間の観方も、変化そのものに對しても、ハッキリ見なければならぬ。それが正しい観方である。此理によつて宗教も文化もその観方や考え方を要するべきであるに拘らず、何百何千年前の宗教の観方を通して、新宗教を批判するのであるから、正確な認識を得られる善のないのは當然である。之が万物流転の説である。(説10)

よく私に對つて、色々な事を訊いたり、又私の方から話す場合、其意味が簡単に判る人は洵に少ないのであつて、事柄としては実に簡単に判りそうなものだが、仲々判らない。訊く人は相當の教養があり乍ら傾けないので、私は色々な例を挙げ、詳々しく並べてやつと判るのである。其程度思ひ出すのは、ベルグソンの哲学である。

何故、簡単な事がそれ程判らないかを考えてみると、斯ういう理由がある。それはベルグソンの所謂刹那の吾にならないからで、勿論それを意識しないからでもあろう。彼の説によれば人間は誰でも物心がつき始めると、色々な事を聞いたので、一人前になる迄には、それが棒のようなものになつて心の中に出事て了う。だから棒以外の説を聞いても、其棒が邪魔をして想念の中へ其まゝ入らない、だから想念の中が空っぽなら、吾もなく入るから直ぐ判る訳で、よく白紙になれなどといわれるが全く其通りである。(黎113)

私共は御教えを拝読させていただくときは、今までの觀念に影響されないように、常に白紙となつて何回もくりかえして御教えを自分の心に素直にいただくよう努力せねばならないと思ひます。

50年の秋季大祭を祝う
 ち（午前10時～午後5時）
 続々お参りされるお客さん

上田小夜子

明主教の然る所以外にないこと
を教へていたのだ。自然療法
の間に用いたかき針、と西十
七年十何の経験も明主教ない故で
「愛しますか」「そういう事情にな
つてゐるの故に愛ですか」との
お返事を迫り決心いたしました。
何となくを主結成です。失敗は
かりと認めました。主の母
に色々教へてゐた。田原手
の時は、足、足の動かし方、手の
動かし方、肩廻りのし方、た
ばね方、本道にあること
と思つておられた。主が、
いやな顔つておすに、ていねに教
えて下さつて感謝しておりました。
昨年（四十九年）色々まわりの中
間もあり、二か所やつておま
す細作の内、か所をやりなすは
いけないうつ状態になりました
が、何とが親戚子に御守護いた
だきたい。と。いふ、どんなてが
あつても一生懸命に御守護して
いた。と。後になすに、たつち
取崩れになり、と。いふ、いけな

御守護をいたさき、「小カブ」な
とは、指が「それぞろのカブ
ではないなう」と。と。か。買つて
きたの、う」といふ、きかない
くらに、同じ大きいカブが、と。れ
ました。そして本年上、明主教
をあらはれ、と。れな、い、い、わ
れている。キ、ベツ、と。無事、取崩
れ、トウガシ、と。植、い、け、ま、た、時
には、有、能、の、半、分、の、大、き、と、り、な
かつた。苗が、取、崩、れ、な、り、ま
した。費、の高、き、が、有、肥、米、並、い、低、
し、品質、の、美、しい、の、を、取、崩
させて、い、け、な、ま、した。
汚水が入り、水の排水、の、な
い田、あり、田、の、入、り、ま、た、な
が、会長、先生、に、御、守護、を、い、た
だ、ま、さ、た、と。い、ふ、「上、田、東、し、

おか

て、自然療法の用いなければならぬ。かたがたに、この本で述べねと断言したとき、毎日30分がたただけ半日お祈りなさいといふなかで、世間を歩いては、たいへんおりました。さう、本にはいいし人間も女も男の秋葉をさせていたなくともできした。

家族に

救

それから信じて人が御守護いだかれまして、至る所救済されています。九月七日おもちいたします。

げ話

ら山笠所で聞けるなさい」と教へて下さったいわゆるのり。此處指折所は以前から試田の色々な検査をお願ひのようによくまが行つておりました。その方がおつしなれます。八屋さんへ売つていゝものは、これぞ太人ほちらん屋さんでおられる北間さんへおつしな信託さんが、お母さんの御手紙を讀んでたなさいと聞かれました。一方は、お母さんのお母さんへ、木さんとおつしなさん十六の方ののですが、家裏の方が、入信して、御手紙をいかにい時は、お母さんの家が近のていじりなまが、その二

つて、くい言がこころれまふ
今も世間の有様で、
明主に教ふにたゞしいに
私共ののりなりかまえて
で、自然法をきいていな
が、裏施されるお導き
ないて心を叩き返さな
いままに

神愛
化の「86歳」

三日集事が入らば、から御需
さんだたいと告げられま
う。早北御探へせていた
き、御導きされたにあら
まされたら、急二間の方か
かいたの様にとあらま
まだが、返事がなく、腰子
かいたのかを尋ねあけ
したが、その時は「足さ

[illegible]

中十郎といふ落飾が出て
 うすが、北國さんの奥から
 母を連れお歸して、目
 明葉を待てたいだうと思
 へば、お孫さん、お孫さん
 給へんのお孫さん全端、お
 れ一人がはられさう
 目にあはるてゐて、「母様
 御存男おかげやね」とい
 へる。あゝ、現代の医学
 方相違ひして、いはずの思
 方相違ひがあり、神様にお
 する方おぼあやんは幸
 學といつてごまかす
 十日（四目）にお疾
 が佳書れた時は、在判
 う思つてきのに、こん

米通る
 のお下

[illegible][illegible]

下の世話
ある状態であ
る間、みんな
と遊んで、
鈴木さ
を招待し
ており

—櫻井弘美

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

自然農法

たのが
れまて
入までも
すです。
食べ
はして
いてる
おれま
がきし
を待さ
らで、朝
つて、朝
られ、お
うまし
うれし

ないておれま
あんなのもある、丈夫な
ままだし、お若き女、実在な
御前、御差いたないてい
頃はあつたといふなら
日曜に過ごして、おなら
告げはお娘さんの問屋
置きていたかき、専
に私にお頼り。おれ
私の方へも、鈴木水戸
中橋の町の水戸、ム
にはきき二、三忙しし
が、何の支障もなく、
おれを兼ねさせくれ
協力してくれませう
明王様のお好みに
上げちよと、いま
おれさん、のぼり通
めて。

明王様に自然法と云々
大切な女の心と云々
われれぬといふ。今
おれ法にはけりや
お娘の心を用ひず

北國の冬はあり
雪がふりかへて
はれば今
は、毎
さん御
さんだ
の御浄化
田の
いねした
夜中は誰
軍中で
農の申し
ん
あらた
はん空に
かゝる大
方の一
はふま

おちて、どんなさ
たかもしれせん
よに私は愛な
す様にもつか
す。この片や
一生のすけい
より明主様の
とまいす。
明主様はよろに
ございました

―原典撰略―

(第) 栄光新聞
世帯綴分
(地) 以上夫国
(教) 三教共
(書) 三教共
光 三教共
光 三教共
光 三教共
光 三教共
(第) 三教共
(第) 三教共
(第) 三教共
(第) 三教共

「光」教を告ぐ

おかけ話

聞さんの奥さんのお母さんで、木ふきさんとおつしやる八士の方なのですが、家業の方が入備です。御浄霊をいたす時は北聞さんの家が近いのでいになります。が、その日

ましたところ、急に前の方
んでいかれますので声をか
ましたが、返事がなく、慓
かしいので横にしてあげても
い、だきかかえて寝かせて
ましたが、その時はもう星を

へかが
りてみ
すがお
とと思
あげま
で

「連絡していたら、手配を
いたしました。」

「と、もうお医者さん
れる前に気がつかれ、お居
る状態にまで御守護いたな
かたに感謝いたします。」

のお米
ド通る

明主様への感謝の意
あふれ、もう少しで泣
とこでした。北國さ
さまは今年七十七歳に
が、以前に脳溢血を患

すようお感じしております。
明主様数々の御守護
りがとてございまして

た。

人の読ぎ

あじろん

家族にも深まる神愛

救われたお浄化の「86歳」

それから信吾さんが御守護い
だされましたとそご報告させ
ていただきます。九月七日、おもち

わかれたお逢

浄化の「86歳」

き、夕食の準備をしてまた
いたがきました。

思ふといつてこられまし
十一日(四日圓)にお
が往診された時には、注
うと思つてきたのに、こ

民者さん
射をしよ
んなに元

いといえは、
後は御浄霊のためにお
れるのでしたら、いつ
にきて、送って行く」と
御浄霊のありがたいと

「でもお迎え
いであんな
もいわれ、
とあなただ
ます。」

早く、鈴木さ
ねのお肝しを
祈りしており

自然農法のお米
だけがノド通る

[illegible]

明主様級の御守護まこととて、
りかへさうございました。

4間馬廻りさんの縁起書
わたくしおぢのすだ。もももわくわく
ガドレールがわくわく
おきれて、いまだに隣い
おて、どんな人になつた
なかもよくん。母がい
なりは父なら、母がい
手にもつかないたいた
す。このかきとこした
一生むけないとうして
わ向主様の目の前あり
と思ひます。
明主様はんらにあがれ
びました。

●原典典籍略語表

(第) 一集新聞(光)
世間敷分(含)
(地) 一地主国
(教) 一御入集
(道) 一御入集
(光) 一御入集
(名) 一御入集
(信) 一御入集
(信) 一御入集
(信) 一御入集
(信) 一御入集
(信) 一御入集
(信) 一御入集

に あ る に 対 し て 明 確 な 説 明 を 求 め る

[illegible][illegible]

うれた
化をい
れます
の方へ
の浄化
を目に
國子を
にかれ
て来て
んかつ
うと
んが出
ていて
おぼち
とあげ
と約束
うで
世話
師で
んも
でき
木さ
しを
おり

[illegible]

高橋ます栄

おかげ話

おかげ話

ひどい交通事故救わる

中學1年 馬瀨 靖子

[illegible]

半信半疑のままお浄霊頂き
耳鼻病治る
 夢のよう 偉大な奇蹟
 桂 春代

[illegible]

中溝美津雄
星野美也子
國田 保
高橋 裕子
黒田 浩代
小林 三幸

大鳴	光福	朝の
丸田	昌子	初冬
森本	政司	赤堀
尾川	三郎	借金
桑田	光雄	暮れ
長瀬田	美子	母に
長瀬田	好子	上り
長瀬田	好子	草刈

に精進せざる者、其の
し初冬の富士山に
富士山の形を引く
交臂持つ者に、秋の雨
續て流れて深淵に現れ
るに、其の形を引く
は故郷の時のまゝ出る
つむ神前に月低くあり
野鳥の言聞えずとて
かれはく、精光もあり秋熱り
一休くして、其の秋
延福くして、其の秋
延福くして、其の秋

弘 切枝 富子 道子 福屋 銅子

服々の松山県、の枝園を
夕島神社にの香にそ
度々上江崎の西に終
キャンパスといつたが
冬日和古寺を訪ねて歩
軒生に這上りて蘭の鉢
あめきてて人の旅の丹
めくくんの神に願はる
三家由緒の母の時を
秋晴雨たわわに子や
生楚等の園上を這ひ
日やを惜しむてやア
おどろきしやア

れず とす	高橋 昭子
降り す	長沢 雅子
を し	長沢 光雄
を し	山口 秀夫
を し	伊吹 之博
を し	田端 義

が、ついにたふさぎだして急に足元のことがなくなり、全身がけいれんをくりかえしながら出ました。さうそうと浄室をいぬき、なんざんとくはてしなく泣いていました。その夜は母が仲間も浄室までついていかれました。

次の朝は、お友達がみんなにづけたかったのが、けんべにつけてあるきまぐら一週間はあんまり足をつかわないでよくのごとで、一日一日といながらたれてはくれぬ、ねているのがたいへん、一週間が一箇のうちに上り下りのあつたのでした。

一週間目はまああれなくて学校に行きました。近所のかたが私の病ぐとなつたのを聞いておどろいていました。

事故の原因が家の電気なので、その直るたびに、かしら私が明王様さんよりじやないかなったんだ、今ではちよつとなっているかと思つただけであつたというほどにわくわくしています。

夢の事故時が、ネットから下に落ちたとき、ガードレールすれず

「口元」即下段に接へ

[illegible]

林加代子	長盛 正明	尾川 三郎	長沢 雅子	星野 光子	藤田 孝	森田 光雄
あかね姫十月を前に	神聖の恵をとりて許す	赤い花は肥田の土	秋晴れの夕の歩き	好日の光景の眺め	紅い魚を釣る夕夜	木犀の深る庭道
あかね姫十月を前に	神聖の恵をとりて許す	赤い花は肥田の土	秋晴れの夕の歩き	好日の光景の眺め	紅い魚を釣る夕夜	木犀の深る庭道

いめい俳句

きり
の別
の別
秋
の角がとく
に開つ
の身
天を指し上田小夜子
あふれくり
の道れ
めぐ
川友
やぐ
愛ひ

星野 卓恵
加畑 寧子
岡本 弘
上田 修一
磯野 初枝
渡部 太郎
野崎 翠
栗木 下野
大塚 辰星
紅梅 太郎

丸山海道選

枯葉散る夕の雨に
 七五三神宮の雨に
 ビルの間に流るる雨に
 紅紅葉車体散る小川
 秋夕の夕顔の気配も
 影あまた面くらげと
 彫る彫る影くらげと
 夕時峠出でた道に
 自動車のプロトタイプ
 秋夕日影長く車
 七五三の木立に
 校庭の木立と
 雨の朝な夕な
 林檎色の雲霞
 さらさらの雲霞
 冬めく曇る夕
 雪ふれし夕
 父より子に
 父より子に

山田 風	森本 啓司	中溝美津雄	星野 光子	岡田 保	高橋 裕子	星野 治代	堀田 亨	西村 直美
------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------

◆(一) 九月通信

雨歟は水木の一花を九月に
常の香ゆへに繁茂の一枝剪る
山藺をこぼりと見ゆる阿比の
山藺を手にとりボを曇りぬる
石は黄の如き雲の如き
アイヌ語に、スツツ走る風の
びの友とて神腰の風
腹戸過ぎ衣をかや五女たり
安すとの皮食を神へ呼び
大徳問ひし者をつとふとて
要の美をひき集る上へ見を
神の古の山に採食
母の山に小枝を供花にす
ステレ木を驚かす樹の下なる
泊りたるステレの木を驚かす
無肥料の環境の波にあり
問ひくるの二つに花を
問ひくるの二つに花を
問ひくるの二つに花を
問ひくるの二つに花を

丸田	昌子	星野	望恵	郡司	鳥華	上田	修一	岡本	弘	加藤	富子	上田	小夜子	川中	風雄	川中	新一	森本	剛子	田原	幸治	多田	照江
秋夜にヤングマンズ 家へ越へたおとせ 娘の噂、聴いたら響 句が生る思ひ残しな 神祕なせむらびを音に 天降に放ちてくさき 瓜金に絆の福徳の車 糸垂す灯籠や夕花 茶碗に霞青々と見 夢みるれぬの跡で																							

[illegible]

人ばかりの目だけ見て驚いて飛ぶ
 のをば、花散る風の夜
 とぞ別れて神床明か明かとの
 の日なとての散草なり
 のみかげや、せの香のつし
 に落つて花の香の遺し
 けほほのし面に被れ果え
 の中花増さしぬ秋の紅
 度は夢さうひつ夢子作り
 の神酒列に上麗く
 と紋着列に拍手あひ
 バンパニールの花しらも
 のめなぞ贈えて出動す
 手抱へ娘身はあつた
 日曜日風ふきあつた
 友を誘つて秋の朝
 の朝下にかはれるのPunch
 して夏の底に月は出ぬ
 して夏の終つて夏草さう
 秋草めける舞人
 明日のきさはこの胸く

[illegible][illegible]

通っておりました。
そんなある日の朝、バスの中で大塚さんと隣り合せておりました四月十二日のこと、私が阪急のドアを開けに入ろうとして、いきなりおぼろけおられたように、大塚さん、お目玉が、買物袋にはまき、突然顔が赤られてはまってしまいました。お目玉のかわと顔が赤らまされて、早速お道のことを話して下さり、医者へ行かなくてはなら

「おきまなくとも油といたなけ
とお聞きし少し不思議でした
と」と思ひ、少し不思議でした
と、お話を聞かせ、ししと申し
したら、大家さん、は市場の仕事
が終わつてから帰分がしていら
と、さういふ、いろいろと有
り、お話をし、お聞きさせていた
た、最後に御静養を、し下さ
い、と、こんなところ、お聞き
か、し、思ひながら、御静

御膳舞臺にいたくと語りも度い
おつしられますので、それか
毎日度入になると思ふまで選
すが、大層さうの家まで寄て
たはまふ、いふも三丁待
とられとして、やっぱり出る
かなあと思ひながら、四、五
つて御膳舞臺にたたきまて耳
向たなう——としてきて気が
れやなうなつて来ましたが、ま
だなうと思つておられまふ、

血がたつて喉乾かたて時
 血が出ます。しかし足方は
 心配がないとおこじやい
 たい、まあ長くそいた
 ださうと云ひ、膝は御浄
 いたたきに頼りました。そ
 うおりますうちに左右の足
 と膝を感じ、夜寝返りを
 するべく頼みました。これは
 いつて何十年の長い間お薬
 であつたがなやうしつと

招きの
 の
 金
 度
 は
 明
 日
 だ
 招き
 の
 金
 度
 は
 明
 日
 だ

思ひになりまして、有難く入札
 料をいれたまへて、本当に
 いかがやうす。

北
い
め
い
俳壇

丸山海道選

七五三
ピルの明
冬工費

萬の雨いまは止み
に遠き冬山目に入りて

森本啓司

[illegible]